HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナホトカ号事故から幾年ぞ. 1
Author(s)	敷田, 麻実
Description	石川版朝刊10版25面掲載、金沢アンダンテ
Citation	朝日新聞
Issue Date	2003-08-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34967
Rights	本著作物は、朝日新聞社の許可のもとに掲載しています。朝日新聞社の許可なく内容の全部又は一部を転載することを禁じます。承諾番号26-2437
Type	article
File Information	1283.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

題字は五木寛之氏

敷田　麻実 ③

ナホトカ号事故から幾年ぞ（1）

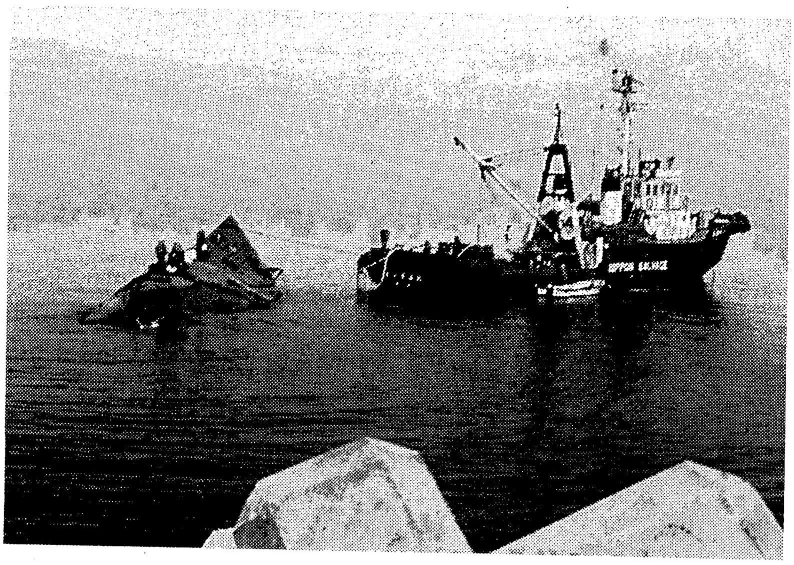
情報源 ネットが活躍

　ナホトカ号が1997年の正月に島根県沖合で沈没し、そこから大量の重油が流れたのはもはや6年半前の話である。時が流れ、世紀が変わってしまったこともあり、日に日にナホトカ号の記憶は忘れ去られてゆくように感じる。15年間の県庁勤務では、大きな仕事や困難な仕事をいくつもこなしたつもりだったが、中でもこのナホトカ号事故は、自分の仕事の重要性や意味を思い知らされた「できごと」だった。

　最初に消防防災課から連絡が入ったのは1月3日の夜だった。タンカーが沈没し重油が流れ出している、水産課からも誰か県庁へ出て来てほしいという依頼だった。しかし最初は重要さがわからず、それくらいのことでなぜ、という思いだった。

　対策の初期は情報不足が深刻で、何をしていいのかわからない。さらに長い正月休みで、国内機関とはほとんど連絡がつかなかった。その「空白」にインターネットが活躍した。携帯電話でメールがやり取りできる今では当たり前のことかもしれないが、ナホトカ号事故の際には、インターネットが貴重な情報源になった。当時、県のインターネットへの接続は、情報政策課でやっとはじまったばかりだった。幸運にも水産課では、前年の国際シンポジウムのために、すでにインターネットに接続していた。

　オイルスピル（油流出）で検索すると、エクソンバルディーズ号の記録のホームページが見つかる。事故を経験した今では誰もが知っているが、油が固形化して扱いにくくなることや、揮発成分の消失と同時に毒性も減少することなどが、手に取るようにわかった。この情報のおかげで、その後の対策でどれだけ冷静な判断ができたかしれない。



重油流出事故を起こしたナホトカ号の船首部分の引き上げ作業＝97年3月、福井県三国町で（敷田さん提供）

　ナホトカ号事故の対策では、いくつもの「山」を経験したが、なかでも分散剤、いわゆる中和剤の使用決定は大きな山だった。分散剤は一定の効果はあるが、その影響も否定できない。このような「灰色」の薬剤を使うか使わないかという判断で、「使う側」が主張するのは「有害性が科学的に証明できないのだから、使用を止められない」という論理だ。また「証明できない危険性で、経済的な価値を損なうことはできない」という責任論が出てくることも多い。いずれも、正当な論理に思えるが、過去の公害病や最近の狂牛病問題の例を見れば、それが「まやかし」であることは明らかだろう。

（金沢工業大教授）